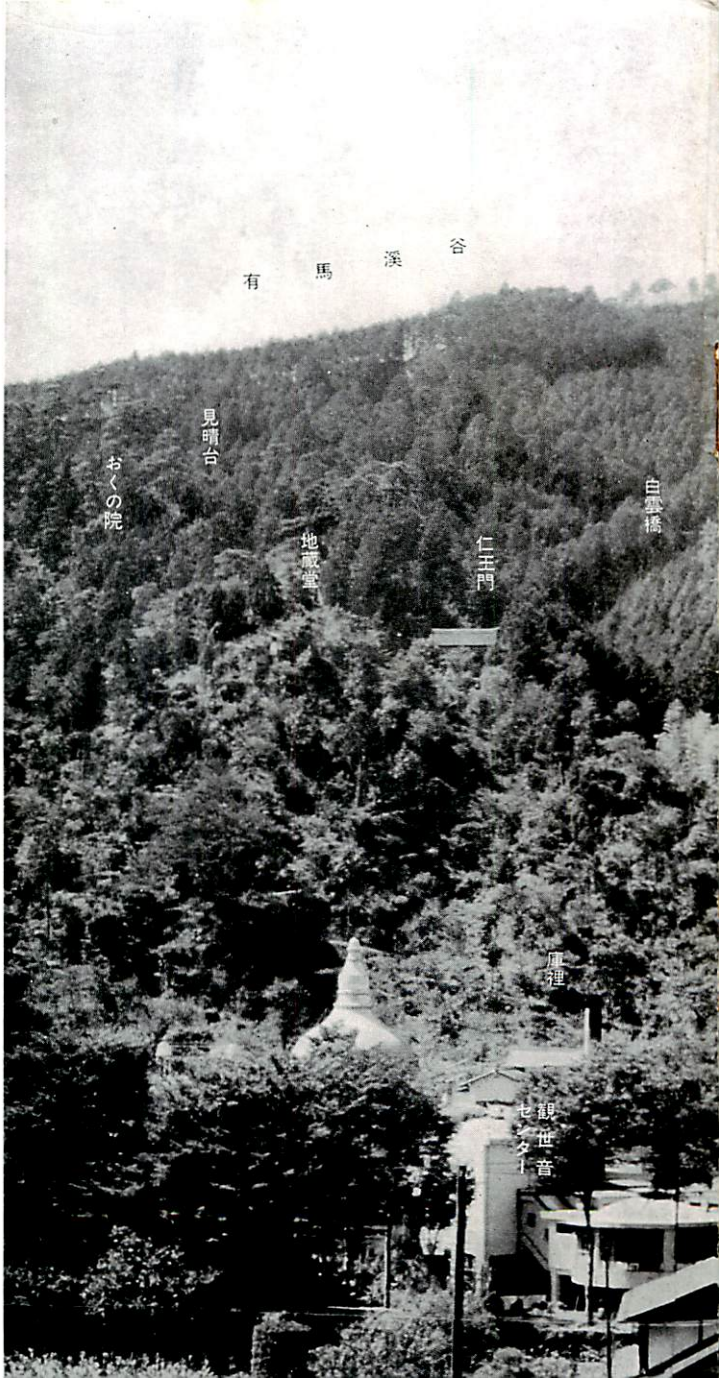


白雲山 鳥居觀音のしおり 5

一月一日発行



風林火山

風林火山

平沼桐江

機略從横の英雄、武田信玄公は、大戦の都度、必ずこの「風・林・火・山」の大幟を本陣に高く翻して、士気を鼓舞したのです。

この大幟を、或るデパートの展示会で見た事があります。

風 実行に当っては疾風の如く迅なること。

林 時には静寂なる事林の如く沈思黙考する。

火 事に当っては猛火の如く士気を鼓舞する。

山 毀貶に会うも泰山の如く毅然たること。

この四字は禅心が根本であり、又生活、事業、も凡てこの仏教の中にあります。

世相は実に紆余曲折まきまきせつ、変転極まりないのですから、吾々は常に時世の動きを洞察して機に応じ、此の四字をたくみに活用して、我が運命を切り開く事を処世術としたいものです。

昭和六年
初稿

申 歳

平 沼 桐 江

新年 御芽出度うございます。

申歳は名栗の様な山国では、猿を大山主の命の眷属として尊敬して居りまして、初申には、山の神の祠に幟を立てたり、篠で造った弓矢と、竹筒にお酒を入れて供えてお祭りを致します。私は子供の頃は此の弓矢で遊ぶのが楽しかったものです。

山の仕事始めも申の日を避け又、お酒で清めてから仕事を始める習慣があります。

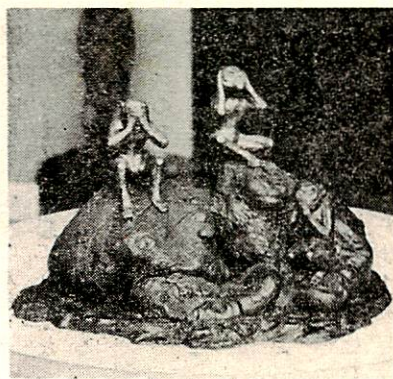
私は四年前の辰年の正月二日に日本航空会社が辰年生れの、学者、実業家、文人、俳優等あらゆる職業の名士七十余名と共に招待されて、飛行機にて二時間位、西日本を飛んで、伊勢神宮、出雲大社其他を上空から謹んで初詣を致しました。

当日は美しい白雲が一面に下界を覆い富士山頂が少し見えたばかりでした。戦後の悪化せる世相只、生きんが為め、食わんが為め、名利を追い金銭の奴隷となって居る人間が持つ貪、瞋、癡、の三毒のための醜い下界を柔かい雲が覆いかくしておりまして、天国か極楽に遊んで居る様な、すが

すがしい気持ちに始めてなり得た喜びは何にたとえ様もありませんでした。

此の時私は此の貪、瞋、癡、から来る人間の醜さから、庚申塚の「見申、聞申、言申」の三申の心境になり得たら、人生はどんなに楽しいものだろうと考えまして、帰宅後、早速この写真の様な三申を彫刻しました。然しこの様な解脱の心境になる事は私のような凡人には遠い夢ですが、少し

でも此の心境に近づきたいものだと勉めて居ります。



三猿の木彫 (鳥居文庫に保存)



高階猊下御法話

昭和42年5月1日

当山とは特に因縁が厚くして、平沼さんの特殊の催には度々来ておりますが、又今回、今日明日の催は平沼さんが自ら、千手千眼観世音を刻まれて、その開眼式が行われここに七体の観音様が揃ったわけで、こうして皆様も来られて参拝されて、このセンターの広間でお話をすると言うことも因縁であります。

さて今日はむづかしい理くつを話してもおわかりにくいと思いますので、観音様の慈悲について次のような歌で書いていただきましたと思います。

慈悲深き人の心ぞ、福聚海

無量のたから、身にぞあつまる

眼（まなこ）をば開きて仰げみ仏の

限なく照らす、慈悲の光を

視そなわす仏の慈悲にへだてなし

もるる人こそ、世にぞ捨てらる

衆（もろもろ）の罪はありとも救わんと

深き仏のちかいたのめよ

生るれば死してゆく世の定めなり

我欲どん欲、ほどほどにせよ

福德をねがう心のある人は

慈悲善根を、人にほどこそ

聚（あつ）めては散らすこと知れ世のために

散りてたからの、光り輝く

海ほどに深く大きく養なえよ

敵も味方も、つつむ心を

無理をして得たるたからは浮雲の

やがて無くなる、ことを思えよ

量（はかり）りなき富にうるおう身とならば

貧しき人に、恵み忘るな

心せよ浮くも沈むもわがことを

人をうらむな、世おぼのろうな

み仏の教えの道はとにかくに

清き心になれとこそあれ

鳥居観音の由来と七観音

(其二)

平沼弥太郎 号 桐江

前号で、聖、十一面、如意輪、の三観音の事など書きましたが二十数年間の事故、書く事はきりが無いのですが、面白くもない事ですから、勉めて簡略にしたので尚更興味がうすれたかと恐縮して居ります。御参拝の折り委しく御聞き願います。

四、不空羅索観音

不空羅索観音は総高三、八四米で大分大きいので江古田の家に粗末なアトリエを造り三ヶ年を要して完成しました。

この観音は、東大寺二月堂の名高い観音を参考にしましたもので、三眼八臂であります。

此の観音様の御利益は、手に持って居られる、鎖鎌の様な羅索で、一切の衆生を引きよせて之を救済し且つ凡ての願いをかなえて下さると云う、法力をお持ちになつて居る事が特長です。

本堂の新築と開眼落慶式

此の七観音を奉安するため、山麓にお寺を建てなければならなくなりましたが、敷地の関係上、横十一米、奥行六米という細長く小さなお寺です。しかも若い人にも親まれる様なお寺臭のない様苦心致しました。

例を掲げますと、屋根の上に二米余の天女の天下りの像をつけた事とか、窓や入口は二枚合せの厚い硝子戸とし、それに極彩色の画や金泥の大法輪を画くとか、須弥壇は其の柱の迦陵頻伽の尾の羽が須弥壇の手摺代用となる様にしたり、壁面には、観音一代記の画等、昭和の時代をなるべく取り入れる様勉めました。

此の本堂は五年を費して完成したので、昭和三十三年五月、高階猊下の導師により、三観音の開眼式と、本堂の落慶式を盛大に挙行致しました。

次の詩は其の時の導師の喝の一部です。

白雲山裡風塵を隔つ 慈母の意志正因をなす
追孝の精神靈妙の力 聖眼を点開し放光新なり

五、馬頭観音（前号写真向う右はじ）

馬頭や准胝観音を小形に彫刻したのは、体具合が良くなかった事や、当時非常に多忙であった為であります。

馬頭観音の台座に、馬頭を三個入れてあるのが変つて居ると思います。

此の観音は頭上に馬頭が乗つて居り、忿怒の顔が三面ついていて、強い明王の相をしているのは、普通の手段では救う事のできない衆生を威圧により善導する為めでありませう。

例えば飢えたる馬の秣を喰うに専念する如く、衆生の苦を喰い尽したり、奔馬の如く迅速に人々の邪悪を取り除いたり、又体が赫色なのは太陽の如く人間の迷暗を照して種々の苦難を救うという三つの御利益を持つて居られます。

伝説によると、或る王様が悪竜（敵軍）に苦しめられて居つたので神様が王様に駿馬をお与えになつた所、此の馬が非常な働きをしたお蔭で悪竜を退治する事ができたので、王様が之を祭つたのが馬頭観音の始まりだとの事です。

印度ではこの伝説により、張り子の馬の頭をかぶつて踊るお祭があります。

馬頭観音は昭和三十三年春、有馬老師により開眼式を挙げました。

六、准胝観音（写真左側）

准胝観音は仏母観音ともいわれる如く、沢山の仏の母であつて、清浄な母性愛を現わした観音でありますから、お顔は美しき母性愛を現わすよう彫つたつもりです。

台座の竜王の一体を、毒蛇のコブラを光背とした印度式にしたのが変つて居ると思ひます。

之は昭和三十五年五月に総持寺の貫首、孤峰智璣禪師御導師の下に開眼式を挙りました。

三蔵法師靈骨塔と武鉄事件

三蔵法師靈骨塔が、多くの善男善女の御協力により十数年を要し、昭和三十五年十二月落慶式を挙行する事ができました。

総高三三米で、日本、中国、印度の各様式や彫刻を取り入れた日本では珍らしい塔だと思ひます。

処が昭和三十六年、武鉄事件に端を発し、私や友人数名が巣鴨に拘留されました。

あの様に投書、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌等で私が贈収賄の中心人物であるように大々的に報道されたので、検事は私が本命であると信じて居ったのですが、調べが進むに従い、私は之には全く関係ない事がわかって私を逮捕した理由がなくなったので途中から、三蔵塔関係による逮捕状と切り替えて、一ヶ月間も拘留されたのです。

そして問題にならぬような三つの罪名で起訴されて、五年間法廷であらそいしましたが、昨年二月無罪の判決を受け、検事の控訴もなく、続いて四月二十九日、天皇御誕生日に、勲三等旭日中授章を授与せられました、斯に全く青天白日の身となる事が出来ました。

是れ全く観世音菩薩の御加護と、皆様の御同情による事と存じ感激して居ります。

然し親しく御交誼頂いていた方々に一方ならぬ御迷惑をおかけし、又世間をお騒がせした事は、何とも申訳なく思っています。只私は悪い事はしていない、と云う信念から法廷に通うのは、学

校にでも通うような気持ちで居りましたが何れ委しく御報告の機もあるかと存じます。

七、千手観音 (写真後列右)

この為め銀行に迷惑をかけては申訳ないと思ひ昭和三十六年に頭取をやめて体に余裕が出来たので、七観音の最後の最も面倒な、千手観音の彫刻に取りかかり、四年を費して昭和四十一年完成する事が出来ました。

胎内納経式は四十年秋、高階瓊仙猊下外役員立会のもとに丁重に挙行了しました。

千手観音は始めて金箔で本式に彩色したので、前の六体とは調和が悪いようにも思います。

昔の千手の御手は蟹の様に両側に並んで居るのが多いのですが、私は花輪の形に配列したのが変っていると思います。

併し手を沢山付けるのは配列がむづかしくて、苦心しました。そしてつくづくと昔の仏師の偉さを感じました。

千手観音は、十一面千手千眼観自在菩薩と云うのを略したのですが、手は四十本で、合掌の手

を加えると四十二本が普通とされて居ります。それは一本の手には二十五菩薩の御力があるので、二十五に四十をかけると、千になるからであります。そして手の平には全部、眼が彫ってあり、手の持物も皆きまって居ります。

千手観音は無量の方便を以て、衆生を救済すると云う、観音の威神力の凡てを形の上に現わして居る事は、聖観音が此の威神力を体内に蔵して居られるのと、よいコントラストであります。

京都の三十三間堂にある千体の千手観音、殊に其の中央に在す大きな千手観音、及び此の眷属である二十八部衆等が、驚くべき名作であります事は、自分で彫刻してみても、つくづく感じます。

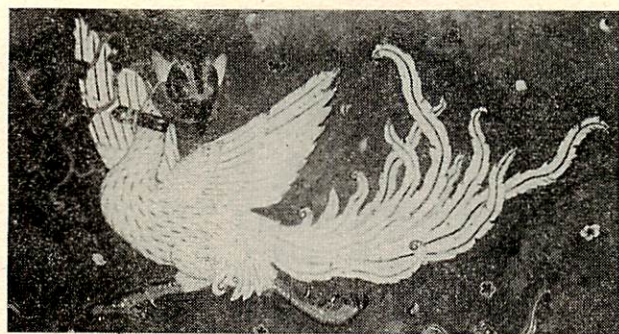
本堂の増築

今迄の本堂は狭かったので、七観音の内三体系畳の上にぢかに置いてあるので畏多く、殊に此の千手観音は大きくて、此のお堂にははいらぬので止むなく本堂を増築して、其の須弥壇に出来上った七観音を全部安置する様に致しました。

そして四十二年五月一日二日の二日間に渡り、

講衆信徒千数百名参列して、高階瓊仙下御導師のもとに開眼及落慶式を盛大に挙行致しました。

これで、七観音彫刻の悲願が達成してほつとした処です。普通のお寺では本尊は普通一体であり



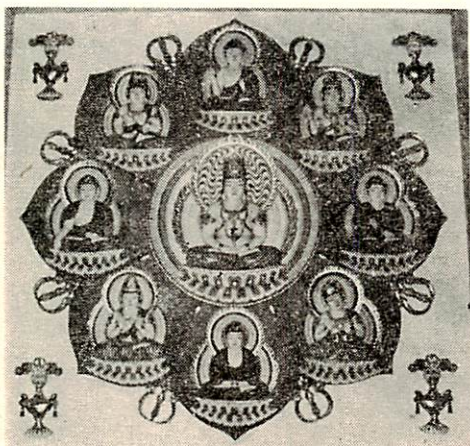
天上鳳凰 (木彫 長さ4.6米 巾2.3米 高さ2.3米)

ますが、各観音の利益の根本は、大慈大悲で大差がないので前号のカラー写真の様に、七体を一ヶ所に並べて、安置して観音全体を御本尊としても差支ないと思

います。増築の天井に五米の鳳凰を木彫にして、落ちない

様に取りつけるのには相当苦勞がありました。

絵を取りつけた天井は沢山ありますが、彫刻の天井はまだ少ないと思います。

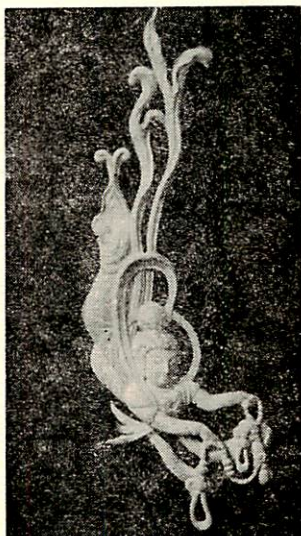


胎藏漫陀羅 (木彫極彩色直径2.5米)

四方の壁面には三十余体の天女其他が取りつけ
てあり、正面の壁には、蓮華の花の形をした直径
二、三米の胎藏曼陀羅が取つけてあります、是等
は皆木彫で極彩色であります。

須弥壇の四隅の四天王は沢田先生作です。

天女像 (木彫極彩色一・五米)



尚お寺の新旧の境には火災防止のため、鉄板の
シャッターが取りつけてあります。

どうか皆様には鳥居観音を参拝下されて御批判
頂ければ有難いと存じます。

各観世音の胎内

観音様には各々お経があります。

たとえば、「仏説七俱胝仏母心大准提陀羅尼經」
と云うお経から、准胝観音が生れ、「仏説観音自
在菩薩如意心陀羅尼呪經」から、如意輪観音が生
れ、「不空羂索神呪心經」から、不空羂索観音が
生れ、「千手千眼観自在菩薩慶大円満無礙大悲心

陀羅尼呪本一卷」と云う長い名のお経から、千手観音が生れたのであります。

各観音様の胎内は皆空洞になって居りますが、之は日割や腐蝕を防ぎ、且つ此の空洞に色々な物を納める為であります。

例を千手観音に取って見ましても、空洞の内面には、千手観音を謹刻した縁起、高階瓊仙猊下と塩入大僧正の御染筆。沢田先生の絵等が書いてありますし、又私の大きな手の平と曾孫令子（一才）の小さな手の平に墨をぬり手形を押してあります。

又内部には白檀の如来木彫、七十余名の篤信者の名を連記した板、妻の書いた、千手観音の写経の名を連記した板、妻の書いた、千手観音の写経として真空管に入れたり又将来修理をする為めに、解体した時、製作した時代がわかり、且つ参考になり興味がある様にと、色々な品物や種等を納めました。其の為め目方は三疋近くになっていると思います。

此の様に真心をこめて胎内に色々納める事は、大慈大悲の観音の御利益が一層深まり、衆生を濟度して下さると云う悲願によるものです。

鳥居文庫にある県文化財に指定されている如来像の下部に穴をあけて内部の物を取り出した跡が、ありましたが、内部が金箔仕上げになって居るのには感心しました。

各観音とも皆胎内納経式には名僧とか役員、信者等が立会って丁重に行いました。

白雲山境内の美観

鳥居観音の寺領である白雲山は、平沼家の長男故邦彦が心よく奉納してくれたのですが、公園としては面積が狭いので、四時楽しめる美しい境内にしたいと思ひまして、私は帰村する毎に鉦と鎌を持って男衆二、三名位連れて境内に入り、つつじ、もみぢ、其他美しい花が咲き又紅葉する樹木を育成する事を二十数年間続けて居ります。

処が入山者のなかに、安行から買って植えておく苗や山百合、高山植物等を抜き取ったり、花、もみぢ等を折って折角苦心した山を荒すと云う公徳心のない者が多いので全く情けなくなりまして、止むなく鉄条綱を張ったり、引き合わぬ入場料を頂いて酔っぱらい等の制限をした所、今度は

鉄条綱は無風流だとか、入園料とはもつての外等との批判もありますが、多くの方々の喜ぶ様な美しい境内にする為めには止むを得ないと存じまして、是等の樹木が大きくなって少しは荒されても差支えない様になる迄、今何年か御辛棒を願います。最近日本人の公德心は幾分良くなった様に見えますが、米国等の先進国にくらべますと遺憾乍ら低級でありまして此の分だと、世界に誇る日本の自然美はいつか消滅するのではないかと誠に寒心に堪えません。

各方面の偉大なる力

二十余年前は戦時中故、今の奥の院だけでも建てられれば有難いと思っておりましたが其うち、仁王門を建て度くなったり、水野梅暁老師の遺品其他彫刻等の保存上、文庫を建てたりしました。

それに信者や団体が参拝された時、雨でも降り出すと御迷惑をかける事が度々ありますので、止むなく庫裡を建てたり、又食事をする処もないので始めは炊出しをして居りましたが之も間に合わず、皆様からの強い要望により、有志の方々で株

式会社観世音センターを造る等、世論の要求によりだんだん拡張されて来ました。

建築には今津技師、服部技師、故三木先生、沢田先生其他多くの方々の御支援がありましたし、建築や彫刻の用材は、平沼家の山林から切り出して使用し、境内の白雲山も平沼家から寄贈されたもので、若しこの山林が無かったら、白雲山鳥居観音は生れなかったと思う時、祖先の有難さが痛感されます。

此の様に多くの有縁の方々の永き間の数えきれぬ程の御援助、御協力は言葉に云い尽せぬものがあります。又、観世音菩薩と亡母の御導きによるものと信じ、誠に感謝の外ありません。

台 掌 終り

西遊記の連載に就て

岡 部 千 三

本年から毎号「西遊記」を連載する事になりました。平凡社の下中社長さんから、同社発行の御本を頂き、それを連載するお許を得ましたので、面白い部分を抜粋して、毎号に掲載します。

鳥居観音で、玄奘さんの御真骨を祭つてある三蔵塔や、玄奘法師銅像等で、親しんでおられる皆様方に、訖度よろこんで頂けると思っています。

玄奘法師は十七年を要して、中央アジアを突破して印度を一周した「大唐西域記」と言う旅行記を二年かかって書きのこされていきます。

「仏教タイムス」に知切先生が之を己に八年余連載しておりますが完了にはまだ十余年はかかると言つておられます。

西遊記は玄奘法師が旅行中の苦難を、中国式に誇大に表現した小説ですが、幸いに知切先生の「玄奘三蔵と西遊記」と言う御講演がありましたので、西遊記をお読みになるのに御参考になると存じ其の一部を転載させて頂きます。

「西遊記」「水滸伝」「三国志」「金瓶梅」が中国の四大奇書です。その中でも「西遊記」が最も広く読まれ、また世界の各国語に翻訳され、日本でも徳川時代から読まれておるくらいです。

大体西遊記と言うものは、化物の孫悟空、猪八戒、沙悟浄が活躍するのが主になっており、いよいよ目的を達して、お釈迦様の所へ参り、玄奘と孫悟空の二人は仏様の、いわゆる菩薩の名前を授けられ、八戒、沙悟浄、の二人もそれぞれ偉い羅漢さんの位を授けられ、五千四十八巻のお経をもらつて帰る大旅行の中で、八十回の大難を見事克服する話しが骨子となっています。

玄奘が十三才の時に、当時の隋の煬帝が二十七人の出家を採用する「度」の試験の触令が出ました。この試験に全国から秀才が三千人余り集つて来た、その中から二十七人をとるわけです。その時僅か十三才の玄奘が、一番でパスしました。これは千三百年経つた現在に至るまで、例のないこと

で、小学生が博士論文に通ったようなものです。

その時の試験委員達が、その人の履歴書を調べてみると、まだ十三才の少年だったので、これにはみなびっくりしました。この試験に二十才以下で通ると言うことは殆どないことだ。それに十三才の子供が通つては我々の良識を疑われるようなものだから、見送ろうではないかと言う空気が強かった。その時試験の委員長をしておられた、隋で一番と言われた長老で大学者の鄭善果と言う方が、大變におこつて『年がいけないとはどう云うことだ、五十年学んでも凡才は凡才、三年学んでも秀才は秀才だ、大体試験と言うものは先生に言われた事、或は本にかいてある事を全部覚えて、それを全部完全にかけば百点満点の筈である、ところが百二十点、百五十点をつける答案と言うものがある筈だ、それは何かと言うと聞いた事を全部心の中で理解し、それ以上の答案が出れば、これは百点以上のものだ、この答案がそれに当るのだ、こういう天才が現われた事は、中国の仏教界にとつて、大變有難いことだ』と言いながら長老は涙を流しておられる。そこで一人が「長老」は

どうして泣かれるのか、と聞きましたところ「自分は徒らに年をとつて、当年八十二才になった。この少年は今から、十年、二十年と勉強したならば全中国を救う、生きた仏になるにちがいない、

それまで自分の寿命が待ってくれない、この少年が生きた仏になった時に、仏果を施してもらうだけの寿命がないのが悲しい」と言つて泣かれたと言う位、当時の評判となつた。以来修行に修行を重ね、二十七才頃になるともう、玄奘に及ぶ学者は中国にいなくなりました。当時の中国では仏教は盛んではあつたが、まだ本當の仏教と言うものが理解されていなかった、丁度、日本の年代にすると玄奘が二十九才の時に聖徳太子が亡くなつております。この様に中国に師を求められなくなつた玄奘は積尊の生れたインドに行き修行するほか方法がないと思ひ、インド留学の願を出したのですが、何度出しても却下されました、それはどうしてかと云うに、何しろ三千里、四千里、という遠い所へ、現在でも謎の地域とされている中央アジアを通り、ヒマラヤを越えてインドまで渡らなければならぬ、今までも何十人という修行僧が

途中で倒れておる、ここでまた、玄奘のような天才に死なれては中国の大きな損失であるという考えからなのです。

玄奘より約二三十年程前に法顯という高僧が朝廷の命令でインドへ留学したことがあります。

その方達は、十一人の名僧と多数の供を打ちつれて多分の、旅費を持っていたのですが、インドに辿りついた時は只の二人だけとなり、その二人は六十才を越えた法顯と、若い道整という坊さんでした。この若い坊さんは、インドの仏法が中国より余りに進みすぎているのに、眩惑されて遂に帰らず印度に止まってしまう、法顯だけ帰って来たのです。これらの事からいくら願ひ出ても許可が下りないのです。その事を知った玄奘は、密かに脱出国の決心をして貞観元年（六二七年）二十七年の時長安の都を出発しました。

西遊記の小説の方では、皇帝の命令でインドへお経を取りに行った事になっています。従って中国を出るまでには比較的楽に行けましたが、実際には長安を出て三日目には玄奘を、連れ戻せというおふれが出て、昼は歩けず、色々の苦勞を重ね

て、都を出て半年、あくる年の三月頃やっと、中国の境の玉門関に辿りついたのです。

玉門関を出て莫賀延碛（げがえんせき）と言う砂漠、ヒマラヤを越え、さまざまな難儀を重ね、貞観三年に三千何百の道を踏破して、インドのネパールに着き一路ナーランダを目指して行きました。

ナーランダと申すのは、インドの有名な王舎城から郊外にありまして、有名な舍利弗、目連の生れた所です。当時ナーランダの道場には三千人のインドの秀才が集まって勉強している、インド随一の道場でした。玄奘はそこで戒賢長老に会うことが出来六年間、その最高の弟子として修業し、長老から瑜伽師地論というお経（唯識の学問）を習い、後インドを巡礼して廻りました。

玄奘は全土を巡礼して歩いていきます。何故かと申しますと、積尊が亡くなられた後、当時の弟子達が集まって結集（けつじゅう）と云う集會を開いて、積尊の言葉をみな覚えていたものを書き綴ったものが今のお経です。そのお経を編纂（へんさん）した後はお弟子達はインド全土にちらばってそれぞれ帰って行き、自分達の土地で積尊の教えを広めたのです。

そこで玄奘はインド全土を歩き、それ等の土地を尋ね、かき残された経文を写し、或は買い集め、その結果十六年目に集まったお経が六百五十七部という大部のお経となったので始めて中国に帰る気になられたのです。

このお経と九体の仏像と、戒日王と云うインドの王様から貰った仏舍利等を持って、実に十七年目の一月八日に長安に帰って来られました。

皇帝は玄奘の人柄にほれこみまして「貴僧は既に十数年の辛苦の末に、インドで修行し、大事な、つまり本当のお経をもって帰ったのだから、も早仏教に対する奉公はすんでいる、自分はこれから新興国の唐を治めていかなくはならないので、人材が必要である、どうか選俗して自分を助けてもらいたい」と云われたが、玄奘は之に答えて『自分がもち帰りました六百五十七部のお経は、インド語で書かれていますからこれを翻譯して、みなが読めるようにしなければなりません、それには是非この翻譯に生涯を捧げたいと思いません。それ故お言葉には従えません』それではというので太宗皇帝は、お経を訳す役所を作って、五

十数人の助手を使ってお経の翻譯にとりかからせました。その翻譯の傍ら二年かかって書き上げたのが、名高い「大唐西域記」で之には玄奘の歩いた百三十九ヶ国の事が紹介されています。

玄奘が長安の都に帰って参りましてから、二十二年間に翻譯した経文が、千三百三十五巻です。最初に着手したのがインドで戒賢長老に学んだ、瑜伽師地論でちょうど百巻あります。その中に皆様もよく親しまれている般若心経というお経の中で一番短いお経があります。このお経は現在も日本のあらゆる宗派で使っていますが、これも玄奘が訳したものです。

玄奘は大変に身体は強健で、美貌であって、しかも、手足の筋肉がとてたくましく、いわゆる理想的な男性ですが、何しろ大旅行中砂漠の暑さ、高山の寒さにたえ、天山、葱嶺、崑崙を越えているうち、リューマチにおかされ、だんだん年をとってから病が重くなりました。その時に、とりかかったのが大般若経六百巻の翻譯で、骨身をけづるような苦勞をなされたのです。

中国では西遊記が出来るくらい、この玄奘を崇

び「真経招来の父」と言っています。本当のお経を印度から持って帰ってくれた、真経招来の功勞を高く評価しております。これは又日本でも言えることと思います。

奈良の薬師寺とか、京都の清水寺というのは法相宗という宗旨で、日本では最も古い宗旨の一つで唯識の学問を主体としていますが、玄奘の学んで来たのもこの学問です。

玄奘が五十二才の時、奈良の之興寺の道昭という坊さんが中国に渡って玄奘の弟子になり、六年間学んで日本に帰り法相宗を開いたのです。

また玄奘という方は、七世紀から十八、九世紀における、世界最大の旅行家で、自分の足で一万里以上歩かれ、しかも百三十九国の、人が通らない謎の国といわれる中央アジアの国々の有様を見て来られ、これを「大唐西域記」にかいておられます。世界的地理学者、旅行家としての功績も高く評価されています。

之等人間わざで出来ない事を、なしとげられたのは、信仰が玄奘を強くさせたからです。つまり何人分かの力を信仰が貸して、これだけのものに

した、これはなんといってもあらゆるものの中で最も強いものです。

よく根性ということが云われますが、根性の最高が私は信仰だと思っています。私は玄奘のなかにそれをみるのです。そう云う意味でこの玄奘というお方を、もう一度見直していただきたく思います。

水野梅曉老師と三蔵塔

白雲山麓名栗川の清流のほとりに立って、その名のごとく白雲棚引く山の頂を望めば、その山中腹に、素晴らしい白亜三層（総高一〇八尺）の玄奘三蔵法師の靈骨塔が建っている、この塔は発願主平沼先生の雄大な基本構想によって設計が進められたもので、鉄骨鉄筋コンクリート造り純白色仕上げで、地上三階、地下一階、出隅付四角形基礎上に八角形の柱を建て、地階は休憩室となっている。一階塔身は隅切八角形とし方形屋根を架し、三蔵法師の靈骨を奉安する。内部の壁面に兎玉希望先生の壁画があり、二階は八角形の塔身と八角形の屋根とで、そこに仏舍利が祭られて居

る。

三階は展望台で円形塔身に十六角形の屋根を架し、銅板瓦捧葺き仕上げ頂上の金色の九輪（水煙付）を取付けて、避雷針が備えてある。塔の裏からはアーク灯によって照明され夜間には塔全形が空中に浮彫りされて見られるのも実に壯観である。

この塔に通ずる自動車道は地形上幾多の障害があったが、どうしても眺望、風光などの点からこの地を選ばれたのである。願主がかつてインド、パキスタン、ネパールの仏跡を巡拝された体験に基き、三蔵法師ゆかりの地、中国、印度等の古代建築様式や仏教美術をとり入れ、尚その上に新しい独創を加えて完成されたものだけに立派なものである。

西遊記で有名な三蔵法師は今から千二百余年前中国唐の太宗の時長安の王華宮で遷化された。その後度々の戦乱でその霊骨は何回も移されてそのうちに埋骨の場所さえ不明となった。ところが昭和十七年当時南京駐屯の高森部隊が整地作業の際偶然にも石棺が発見された。その中には三百余点の寶石、文献、霊骨が現れた。それを充分調査研

究の結果、三蔵法師の霊骨とその附属品であることが確認されたので、高森部隊長は之を全部中国国民政府に引渡した。

戦乱中と雖も国民政府は、法師の霊骨を最高の礼を尽して迎えやがて二千万弗の巨費を投じて南京域外の玄武山上に堂々たる大陸式霊骨塔を建立したのである。

玄武山上の霊骨塔落慶式後、国民政府は予め分骨してあった霊骨の一部を日本に分贈する旨の申し出があったので、日本側仏教代表として仏教連合会の倉持秀峰師、水野梅暁師らが楮外交部長の手から受領して日本に持ち帰り東京で丁重な慰霊法要を営んだ。その後王兆銘政権が蒋介石氏に移った時、色々の事情で一度返還し再び、分骨を受けたのである。折から大東亜戦の激烈な時で、東京も日夜空爆下にあったので、霊骨を一時埼玉県岩槻の慈恩寺（天台宗）に奉安した。

後に住職大島見道師や水野梅暁師の尽力で同寺境内に霊骨塔を建立された。

その際水野老師は法師の御徳が日本国内に広く及ぶことを希望され、第二の故郷とまで言って平

沼家に長いことおられて親しまれた名栗に、丁度平沼先生が観音像を謹刻して御堂を建立し開山へ発願されているのに力をそえておられたので、ここに法師の霊骨の一部を贈られ永遠に民衆の霊場とするよう懇望されたのである。

お知らせ

表紙の裏の桐江先生の書「風林火山」を御希望の方は寺務所まで御申し出ください。

鳥居観音の年中行事

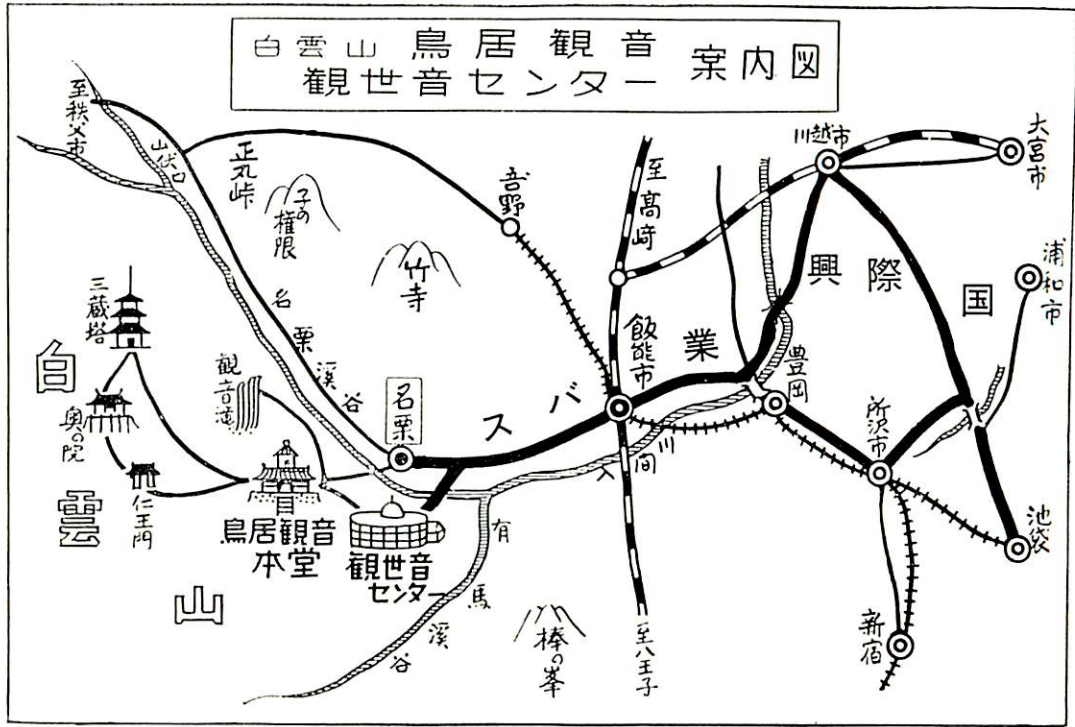
- 一月一日 新年祈禱会
 - 一月十七日 月例法要（毎月十七日）
 - 二月三日 節分会
 - 二月十五日 积尊涅槃会
 - 三月 彼岸 春季法要（戦没者特別法要）
 - 四月八日 积尊降誕会
 - 四月十七日 春季大祭
 - 七月十日 四万六千日特別法要
 - 八月十六日 孟蘭盆流灯大供養会、煙花大会
- 盆踊大会

- 九月 彼岸 秋季彼岸会
- 十一月十七日 秋季大祭（玉華門落慶式）
- 十二月八日 积尊成道会
- 十二月三十一日 除夜特別供養会

鳥居観音のしおり 第五号

発行日 昭和四十三年一月一日 毎号定価貳拾円
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音岡部千三
発行人 浦和市 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音 電話 名栗五番
発行所 鳥居観音 電話 名栗五番

白雲山 鳥居 観音 案内図
 観世音センター 案内図



秋葉山

面白岩

→
観音滝

琴比羅神社

三蔵塔



蛇の目傘四阿

壇輪利四阿

梅曉之亭

梅月橋

本堂

鳥居文庫

名栗川